

[研究報告]

関わりを回避する若者たち —1997年調査と2019年調査を比較しながら—

岡 林 春 雄*

近年、若者は、他者と関わることを避け出している。1997年調査結果と2019年調査結果の比較から、今（2019年調査時）の若者は、他者との関わりにおいて1997年調査時の若者と同じような思考ループをもちながらも、その思考ループが繰り返されることによってネガティブスキーマが働き、対人回避傾向の強い心理を表出することになったということがわかった。また、一方では、自分を認めてほしいという願望が強く、そのギャップから心身症のような不適応現象が生じやすくなっていることが示唆された。そこから若者たちに、1.「気が合う」といった感覚には理屈などないのに、何故、理屈を述べないと関わりがもてなくなっているのか、2. 関わり「ぶつかる」ことは悪いことなのか、3. 社会性、コミュニケーション能力、イマジネーション（洞察力、想像力）を身につけてみてはどうだろう、といった問題提起がなされた。

キーワード：若者の関わり、思考の悪循環、対人関係、いじめ

はじめに

人は関わりの中で育ってくる。関わりがあるからこそ周囲・自分にとっての外世界との情報処理に関わるやりとりが活発に行われ、思考・感情が発達し、人として成長するのである。人の発達段階は、一般に乳児期、幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期と表現され（岡林、2010）¹⁾、若者、すなわち青年期に至るまでには、母性、両親、兄弟姉妹を含む家族、祖母、祖父、そして、近隣の人、保育園・幼稚園の関係者、学校での教師や友だち等々との関わりの積み重ねから青年期の今の関わりが存在する。Erikson（1968）²⁾の発達段階説によれば、乳児期の発達課題「基本的信頼 vs. 不信」の対象となる重要な人は母親（母性）であり—母性にあたる人を心から信頼できるという感覚を持てるようになるかどうかが大変な時期である。幼児前期の発達課題「自立性 vs. 恥・疑惑」の対象は両親であり、両親との関わりを通して自分の意志で排泄や生活をコントロールできることを学ぶ時期である。幼児後期の発達課題「積極性 vs. 罪悪感」の対象は基本的家族であり、家族を通して自分の考えをもち自分で行動することを覚える時期である。児童期の発達課題「勤勉性 vs. 劣等感」の対象は近隣の人や学校関係者であり、近隣の人や学校関係者を通してやればできるという体験を得て勤勉に努力することを覚える時期である。青年期の発達課題「自我同一性 vs. 同一性拡散」の対象は仲間集団やリーダーシップのモデルであり、仲間集団やリーダーシップのモデルを通して自分はどのような性格なのか、将来どのような生き方をしたいかを模索しながらアイデンティティを確立していく時期である。

成人前期の発達課題「親密さ vs. 孤立」の対象は友情・性・競争・協力の相手であり、特定のひとと親密な関係をもつことで相手を尊重し、大切に想う気持ちを育むようになるとしている。このように人は、他者と関わりながら人間として成長してくる。

ところが近年、若者は、関わりがもてない方向、または、自らもたない方向に動いているようにみえる。大学の授業でディスカッションを行おうとしても、単発的な発言が出てくるだけで、話が絡むということが少ない。他者の発言に対してコメントすることは他者に対して失礼なことであり、さらには、攻撃するという意味であり、その反応から自分が傷つくという事態を極端に避けようとしているように思われる。少人数だったら会話が弾むかと思えば、4、5人で集まり、無言の行に入ってしまうことも珍しくない。少人数でデータを取り、そのデータをもとに考察するという作業を課しても、取ったデータをラインで送りあい、後は、各自でやるということになり、いろいろなアイデアを出しながら考察を深め合う、等ということはかなり難しい。なかには無言の行は時間の無駄だとして勝手にしきり、他者に指示を出し、自分の必要なデータを手に入れ、他者のやったことをコピー＆ペーストし、自分のものとするといった本来の目的を外し、討論もない、思考もないといった状況が現出する。若者にとっては、授業中よりも休み時間、そして、授業時間になったのだからまだ先生が来ないという時間が恐怖だと言う。その時間、友だちとたわいのない話をするわけでもなく、誰と何を話したらよいかかわらず、その状態から一刻も早く逃げ出したいと思っている若者たち

*人間生活学部心理学科

が多い、ということが彼らの日常を通してわかってきた。その文脈で、電車通学やバス通学の際、他者と目が合うのが怖くて、目を上げずにスマホをいじっているという話もよく聞く。「どこを見ていたらよいかかわからない」のでスマホがないと本当に困ると訴える若者が多いのも確かである。

若者は、他者との関わりをどうしてそこまで気にし、避けるのだろうか。この質問に対して、多くの若者は「私は元来、人見知りで……」、「いじめ体験によってこうなった」と解説する。「元来」、「もともと」と言われると、それはいつからのことかと追及したくなるのだが、それよりも問題なのは「人見知り」だという考え方、つまり、逃げ方と言ってよい思い込みである。彼らが言っている「人見知り」とは「引っ込み思案」のことで、外には出せないが自分の内ではいろいろ考えているということをお願いののだと思われるが、はたしてそうなのか。この思い込みに関しては、何故それが起こってくるのかをふまえて、彼らの向性指数（Jung, 1929³⁾の理論から淡路, 1932, 1933⁴⁾が質問紙を作成：心的エネルギーが自分の外に向かっているのか、内に向かっているのか、どちらが優勢なのかが示される）のデータと合わせて考察したい。また、「いじめ体験が影響してこのような関わり方になった」という説明は、マスメディアの報道や世代論、若者論で言われてきた論調である。この「いじめ」という言葉は現象に付けた名称であって、症状名ではなく、ましてや原因から出てきた名前でもない。一応、「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査における定義」（文部科学省, 2018）⁵⁾として規定されているのだが——【昭和61年度からの定義】この調査において、「いじめ」とは、「①自分より弱い者に対して一方的に、②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、③相手が深刻な苦痛を感じているものであって、学校としてその事実（関係児童生徒、いじめの内容等）を確認しているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わないもの」とする。【平成6年度からの定義】この調査において、「いじめ」とは、「①自分より弱い者に対して一方的に、②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、③相手が深刻な苦痛を感じているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わない」とする。個々の行為がいじめに当たるか否かの判断を表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行うこと。『学校としてその事実（関係児童生徒、いじめの内容等）を確認しているもの』を削除。「いじめに当たるか否かの判断を表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行うこと」を追加。【平成18年度からの定義】本調査において、個々の行為が「いじめ」に当たるか否かの判断は、表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行うものとす

る。「いじめ」とは、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」とする。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。「一方的に」、「継続的に」、「深刻な」といった文言を削除。「いじめられた児童生徒の立場に立って」、「一定の人間関係のある者」、「攻撃」等について、注釈を追加 ※いじめ防止対策推進法の施行に伴い、平成25年度から以下のとおり定義されている。「いじめ」とは、「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」とする。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。「いじめ」の中には、犯罪行為として取り扱われるべきと認められ、早期に警察に相談することが重要なものや、児童生徒の生命、身体又は財産に重大な被害が生じるような、直ちに警察に通報することが必要なものが含まれる。これらについては、教育的配慮や被害者の意向への配慮のうえで、早期に警察に相談・通報の上、警察と連携した対応を取る必要がある。文部科学省の定義自体が変遷している。それだけ、いじめという現象は変容しているのであり、犯罪レベルの問題や人間関係そのものの難しさを含んでいるのである。本稿では、若者が「いじめ体験によって現在の関わり方になった」というより「若者が語るいじめ体験そのものが彼らの人間関係を映し出している」という視点で若者の関わり方に迫りたい。

いじめに関しては、1986年「中野富士見中学（鹿川君）事件」が日本で初めてのいじめ自殺事件として報道され、「葬式ごっこ」を学校でやったという非常識さに加えて学級担任がそれに加担していたという耳を疑う情報が入ってきて、日本の教育現場は何をやっているんだという不信感が沸き上がった。そして、1994年「西尾市 大河内清輝君（当時中2）事件」——報道等⁶⁾⁷⁾⁸⁾から次のように概観できる。大河内君の自殺（11月27日）の翌日、学校は教育委員会に「突然死」と報告。校長は、全国集会で生徒に「軽はずみに人に話さないように」と伝え、報道陣にも「（いじめの）事実が出てこない」と発表。学校は、生徒全員に作文を書かせ、「清輝君はやさしすぎた」、「苦しんでいたなんて知りませんでした」、「命をそまつにしたのはいけない」、「彼はふつうに見えた」といった文章が提出された。その後（12月14日）担任が何もコメントを出していないという追及を受けて、担任の女性教師が「なぜ、清輝君の心の叫びをわかってあげられなかったのか。自分が悔しい（中略）清輝君、いつまでもみんなを見守ってください」という手記を発表。西尾市教育委員会の調べでは、清輝君への

いじめに関わったのは、主犯格 4 人を含む 11 人。2 年生の 5 クラスにまたがっていた。そして、清輝君の自殺直後「黙っていればわからない」と申し合わせていた。いじめグループのリーダー格 A は「社長」と呼ばれ、腕力がずば抜けていた。その下に「極悪集団」と呼ばれる生徒数人がおり、さらに下に「パシリ」、「召使」として清輝君らがいた。序列は、「社長」を除きたびたび変わった。清輝君から脅し取った金はいったん「社長」のもとへ集められ分配していた。事件当時はグループのトップだった A も、かつては上級生に「生意気だ」と言われ、使い走りにされたり、お年玉を巻き上げられたりしていた（以上、当時の報道記録から事実と認定できる話をまとめた）。大河内君自殺事件が起こった後一カ月で、数キロしか離れていない中学校でも同様のいじめ自殺事件が起こっている。つまり、この学校、また、この地域ではいじめの世代間連鎖、再生産が起こっていたのである。

その後も、2011 年の「大津いじめ自殺事件」を含め、いじめに関わる自殺事件は数多く起きており、関連する報道や情報から人々は燦燦たる思いになり、それが行動や意識に影響してきたことは確かである。そして、とくに若者は、同世代に起こった出来事をどのようにとらえ、自分自身のあり様に思いをいたらせたか、非常に興味をわくところである。

本稿では、近年の若者（2019 年に大学や専門学校に入学した人たち）の他者との関わりの特徴を明らかにするが、それにあたって、大河内君自殺事件が起こった時、ちょうど同じ思春期にあった若者たちのいじめを中心にした他者との関わり感覚（1997 年調査）と比較しながら、若者たちの関わりについての意識、行動の変容について検討したい。

方法

研究参加者：

- ・2019 年に大学や専門学校に入学した若者 101 人（男性 33、女性 68；出身地——幼稚園・保育園、小学校、中学校、高等学校の所在地——は関東から沖縄まで西日本全域にわたる）…… 2019 年調査
- ・1997 年に大学や専門学校に入学した若者 287 人（男性 57、女性 230；出身地——幼稚園・保育園、小学校、中学校、高等学校の所在地——は関東から沖縄まで西日本全域にわたる）…… 1997 年調査

調査項目：2019 年調査ならびに 1997 年調査に共通

- ・向性指数
- ・自尊感情尺度
- ・小学校時代の体験（先生との楽しい思い出、学校に行きたくなくなったことがある、実際に行かなかった）
- ・中学校時代の体験（先生との楽しい思い出、学校に行

- きたくなくなったことがある、実際に行かなかった）
- ・高等学校の体験（先生との楽しい思い出、学校に行きたくなくなったことがある、実際に行かなかった）
- ・いじめをした（いつ、どのような）
- ・いじめをされた（いつ、どのような）
- ・周囲で見た（いつ、どのような）
- ・先生は知っていた（どのような対応した）
- ・親は知っていた（どのような対応をとった）
- ・自分の対人関係に自信があるか
- ・自分の対人関係の特徴

結果

1997 年調査と 2019 年調査の基本データを示す (Table 1)。

向性指数

1997 年データ（平均値 111.4；標準偏差 26.37；データ数 263）と 2019 年データ（平均値 101.7；標準偏差 24.07；データ数 97）に関して分散分析（ANOVA）をかけてみたところ危険率 1%水準で有意差が見出された ($F(1, 358)=10.04, p<.01$)。2019 年の調査対象者の方が向性指数は下がっている。

自尊感情尺度

1997 年データ（平均値 24.6；標準偏差 4.08；データ数 179）と 2019 年データ（平均値 22.67；標準偏差 4.21；データ数 75）に関して分散分析（ANOVA）をかけてみたところ危険率 1%水準で有意差が見出された ($F(1, 252)=11.08, p<.01$)。2019 年の調査対象者の方が自尊感情尺度得点は下がっている。

学校体験

小学校時代、「先生との楽しい思い出がある」人の割合は、1997 年調査に比べて 2019 年調査で減っている。「学校に行きたくない」と思った人の割合は、1997 年調査より 2019 年調査で増えており、半数以上の人が学校に行きたくないと思ったということである。それでも「実際に学校に行かなかった」人の割合は 1997 年も 2019 年も 2 割ほどである。

中学時代、「先生と楽しい思い出がある」人の割合は、1997 年調査より 2019 年調査で減っており、2019 年調査では 6 割を切り出している。「学校に行きたくない」と思った人の割合は、1997 年調査から 2019 年調査で増えており、6 割近くになっている。「実際に行かなかった」人の割合も 2019 年には 3 割の半ばまでになっている。

高等学校時代、「先生との楽しい思い出がある」人の割合は、1997 年調査から 2019 年の調査で減っている。「学校に行きたくない」と思った人の割合は 1997 年から 2019 年で増えており、「実際に行かなかった」人の割合も 1997 年から 2016 年にかけて増えており、2019 年には 4 割に近づいている。

Table 1
調査基本データ

調査年		1997	2019
向性指数	平均 (標準偏差)	111.4 (26.36)	101.701 (24.07)
	25%tile, 50%tile, 75%tile	96.0, 112.0, 132.0	88.0, 102.0, 118.0
自尊感情	平均 (標準偏差)	24.55 (4.08)	22.67 (4.21)
	25%tile, 50%tile, 75%tile	22.0, 24.0, 27.0	20.0, 23.0, 26.0
<小学校>			
1. 先生との楽しい思い出がある			
	はい	218 76.0%	64 63.4%
	?	11 3.8%	4 4.0%
	いいえ	58 20.2%	33 32.7%
2. 学校に行きたくないことがあった			
	はい	125 43.6%	52 51.5%
	?	7 2.4%	1 1.0%
	いいえ	155 54.0%	48 47.5%
3. 実際に行かなかった			
	はい	62 21.6%	24 23.8%
	?	5 1.7%	0 0.0%
	いいえ	220 76.7%	77 76.2%
<中学校>			
4. 先生との楽しい思い出がある			
	はい	200 69.7%	59 58.4%
	?	15 5.2%	5 5.0%
	いいえ	72 25.1%	37 36.6%
5. 学校に行きたくないことがあった			
	はい	140 48.8%	60 59.4%
	?	2 0.7%	0 0.0%
	いいえ	145 50.5%	41 40.6%
6. 実際に行かなかった			
	はい	67 23.3%	37 36.6%
	?	2 0.7%	0 0.0%
<高等学校>			
7. 先生との楽しい思い出がある			
	はい	182 63.4%	58 57.4%
	?	21 7.3%	3 3.0%
	いいえ	84 29.3%	40 39.6%
8. 学校に行きたくないことがあった			
	はい	129 44.9%	61 60.4%
	?	3 1.0%	0 0.0%
	いいえ	155 54.0%	40 39.6%
9. 実際に行かなかった			
	はい	86 30.0%	39 38.6%
	?	0 0.0%	1 1.0%
	いいえ	201 70.0%	61 60.4%
<いじめをした>	はい	135 47.0%	29 28.7%
幼稚園・保育園 (延べ人数)		6	0
小学校 (延べ人数)		94	17
中学校 (延べ人数)		39	12
高等学校 (延べ人数)		13	3
いじめの種類 最頻値		集団無視	集団悪口
次点		集団悪口	集団無視
<いじめを受けた>	はい	137 47.7%	42 41.6%
幼稚園・保育園 (延べ人数)		11	0
小学校 (延べ人数)		79	28
中学校 (延べ人数)		58	23
高等学校 (延べ人数)		12	8
いじめの種類 最頻値		集団悪口	集団悪口
次点		集団無視	集団無視
		1 対 1 悪口	
		1 対 1 無視	
<周囲でいじめを見た>	はい	226 78.7%	62 61.4%

幼稚園・保育園 (延べ人数)	6	0
小学校 (延べ人数)	80	28
中学校 (延べ人数)	146	23
高等学校 (延べ人数)	36	8
いじめの種類 最頻値	集団悪口	集団悪口
次点	集団無視	集団無視
	集団で殴る	集団で持ち物を取る
	集団で持ち物を取る	1対1悪口
	1対1悪口	
<調査時、自分自身の対人関係に自信がある?>		
はい	113 39.4%	37 36.3%
?	67 23.3%	14 13.7%
いいえ	103 35.9%	50 49.0%

いじめ体験

いじめ体験に関して1997年と2019年で違いがないか確認したところ、「いじめをしたことがある」($\chi^2(2)=10.82$, $p<.01$)で1997年の方が2019年に比べて有意にいじめをした人の割合が多かった。「いじめを受けたことがある」($\chi^2(2)=1.55$, $p=.46$)では、1997年と2019年の間には有意な差が見られなかった。また、「周囲でいじめを見たことがある」($\chi^2(2)=13.38$, $p<.001$)では、1997年の方が2019年に比べて周囲でいじめを見た人の割合が多いことが見出された。ただし、これらの χ^2 検定では、2セルが期待度数5未満であった。

いじめをしたとき、ならびに、いじめを受けたときは、1997年調査でも2019年調査でも小学校が一番多く、次が中学校、高等学校と続く。いじめを周囲で見たのは、1997年調査では中学校が一番多く、次が小学校であるのに対して、2019年調査では小学校が一番多く、中学校がそれに続く。さすがに高等学校時代のいじめは、「今頃何をやっているのか? 遅れている」といった感覚をもって見られているようである。

いじめの種類に関しては、1997年調査ならびに2019年調査でも、集団悪口と集団無視が圧倒的に多いのだが、「いじめを受けた」項目への回答として、「1対1での悪口」、「1対1での無視」、「仲間外れ」(以上1997年調査)、ならびに 集団悪口と集団無視が合わさったもの(2019年調査)と細かい説明が見られた。さらに、「周囲で見た」項目への回答としては、「集団で殴る」、「集団で持ち物を取る」、「1対1で悪口」、「孤立させる」、「集団で男子が一人の女の子を無視したり、ゴムを投げたり」(1997年調査)、「集団で持ち物を取る」、「1対1悪口」、「返事はするが、嫌悪感が感じられるように(原文のまま)」、「私物が切りつけてあった」、「物が隠されていた」(2019年調査)と回答者自身のフラストレーションが感じられる記述が多かった。いじめのことを思い出してもらったのは調査に参加してもらった人にはつらいことなの

ではないかと心配したのだが、むしろ、いじめの体験を聞いてくれ、話をさせろという気持ちの方が強いように思われた。

いじめのきっかけは、1997年調査でも2019年調査でも、「なんでもあり」だという。他の人と違っていても（例. 皮膚の色、言葉、考え方 等々）、同じであっても（例. キャラかぶり、経済的貧困、裕福）、どのようなことでもいじめの理由になる。ムカつく気持ちが先にあるので、理由は後付けなのであろう。先日まで仲がよかったと思ったら、ある日突然、すれ違った際、「空気が悪くなった」と言われたりすることはまれな話ではないということである。

対人関係に自信がある

自分の対人関係に自信があるかどうか尋ねた質問項目に関して、1997年と2019年では違いがあるかどうか確認してみたところ、 $\chi^2(3)=8.28, p<.05$ （ただし、2セルは期待度数が5未満）で有意差が見られた。2019年の「対人関係に自信がない」人の割合が有意に高くなっていった。

自分の対人関係について

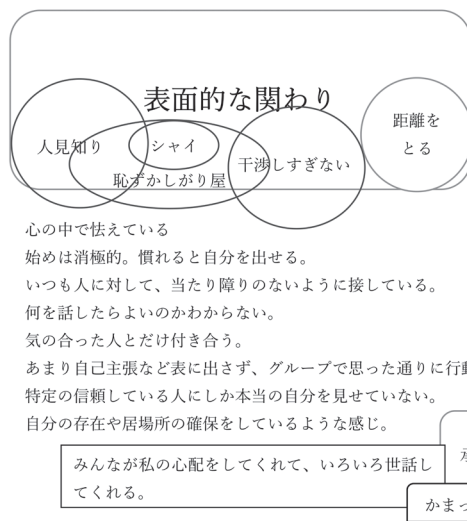
自分自身の対人関係について自由記述してもらったデータについて見てみたい。それらの自由記述の語りに関して、KJ法に基づき、まとめた（Figure 1）。

その他にも、1997年調査では、「今の学校では本当の友だちという者に出会っていない」（自分の対人関係の自信は「わからない」、いじめた、いじめられた、周囲で見た——すべて経験）、「高校時代の友だちが一番大切な友だち」（自分の対人関係に自信は「ない」、いじめはすべて経験）、「はじめての環境だと、どうしても無口になる。だから、はじめの印象と違うと言われる。自分では

話そうとしても、どうもうまくいかない」（対人関係に自信「なし」、いじめた&周囲で見た）、「広く浅く。深く踏み込まれると気分が悪い！」（対人関係に自信「なし」、いじめた）等々、他者と関わる気はそれなりにある記述が多い。

一方、2019年調査では、「何かあったら崩れてしまう可能性もゼロではない」（対人関係に自信は「わからない」、いじめはすべて体験）——言われてみればそうなのだが、「あなたの対人関係の特徴は？」と聞かれて、わざわざこのように書くというのは、よほど日頃から気にしているのかもしれない。「自分からはあまりしゃべらない。一度うまくいけば、いっきに距離をつめる。距離感がおかしい。3人以上の会話では、いつ意見を言うべきかわからない。会話が安定しない」（知人関係に自信は「ない」、いじめられた、周囲で見た）。「自分と似た価値観を持っている人と親しくなる。価値観が遠かったり、信じられない人とは何となくの付き合いをして、自分の本心を出していない（原文のまま）」（対人関係に自信は「ない」、いじめは周囲で見た）——これはいつの世にも共通の感覚なのだろうが、全員と仲良くしなければいけないのに、自分はそれができていない、という表現である。どこで、そのような縛りの感覚が植え付けられたのであろうか。周囲の大人（学校の先生等）が自分の都合で（例 みんなが表面的にでも仲良くしてくれればクラス運営を行うのが楽である）、押し付けているのではなかろうか。「気が合う」という感情は個人のものであり、その感情が出現してくる環境調整をすることができても、感情そのものを植え付けるということは周囲がしてはいけないことであるし、若者各自が自分で判断しなければ「人」でなくなってしまう。

<1997>



<2019>

壁を作る・バリアーを張る

紋切り型の会話になりやすい。個人に踏み込んだ話はしない。私は一人の世界を楽しみ、一人で笑っている。

<壁を作っても、作らなくても>他者とのように接するのか、非常に意識している

壁を作らない

いろんな人と話すけど、自分の素を出せるのは数人だけ。人より一歩引く。下手に下手に出る。自分から話題を提供し、相手に話をさせ、相手が話をしている楽しくなるような雰囲気にする。あまり信じないようにする。自分からはあまり喋らない。一度うまくいけば一気に距離を詰める。距離感がおかしい。3人以上の会話では、いつ意見を言うべきかわからない。会話が安定しない

自分が困っている時、助けてくれる。何も言わなくても、私の気分が落ちている時は気づいてくれる。理由は聞いてこないけど、ずっと一緒に居てくれる。皆が話を聞いてくれる。

Figure 1 対人関係の特徴（若者たちの言葉より）：1997年と2019年

「表面的な関わり」を強調した1997年調査から「壁を作る」ことが中心テーマになった2019年調査へは連続性があるであろう。また、「壁を作る」に対して「壁を作らない」と答えた人も若干ながらいただが、どちらも他者とどのように接するのか非常に気にしており、内容的には同じ心理に辿り着く。その一方で、かまってほしい、認めてほしいという承認欲求が見られ、その傾向は2019年の調査で潜在的な特徴になっている。

考察

関わりというものは固定的ではなく、相手との相互作用によって変化・変容していく。若者たちは、相手の出方を気にしながら、自分が傷つかないように防衛をかけていることが1997年調査の若者ならびに2019年調査の若者の反応からわかってきた。彼らの関わりについて共通している考え方を思考の流れ図として、はっきり出さない例（Figure 2-1）ならびに勝手に仕切る例（Figure 2-2）を示しておく。この悪循環していく思考には、彼ら特有のスキーマ（schema）と呼ばれる、いわば、思い込みが存在しているように思われる。

また、「いじめをした」人の割合は、1997年調査時よりも2019年調査時に有意に減っている。さらに、「いじめを周囲で見た」人の割合も1997年に比べて2019年は有意に減っている。しかしながら、「対人関係に自信がある」人の割合も1997年に比べて2019年には有意に減少している。これは一体どういうことであろうか。「いじめを受けた」ことによって「対人関係に自信がなくなる」というのならいざ知らず、「いじめをしない」人の割合が増え、「いじめを周囲で見た」人の割合が少なくなっているのに「対人関係に自信がある」人の割合が減っているのである。これは、他者との関わりそのものが少なくなっているがために、いじめもしないし、周囲でも見ないが、対人関係にも自信がもてない、ということなのではなかろうか。

1997年調査時の若者は他者とどのように関わるかについて気を遣っていたのに対して、2019年調査時の若者は他者とどのようにしたら必要以上に関わらないで済むのかに腐心しているように思われる。他者と違った意見や考え方をもっている場合、どうすれば角が立たないように伝えられるか、または、黙っておく

か悩んでいたのが1997年調査のメインストリームであろうが、2019年調査では、他者とぶつからないようにする、違う意見を持っているのかどうかさえ分からなくする、というのがメインストリームになってきている。このセクションでは、友人関係、先生との関係、親との関係から総合的に若者の関わりの変化・変容について考え、これまでの世代論、若者論との整合性について論述する。

友人関係：友人関係が象徴的に暴露されてくる場面がいじめである。1997年調査時と2019年調査時の若者たちがそれぞれ、いじめに遭遇した（いじめた＝加害者、いじめられた＝被害者、周囲で見た＝傍観者・聴衆者）機会はとくに違いがあるとは思えないのだが——決して減っているとも言えない、他者と関わることを避けてだしているのである。いじめに遭遇したくなければ関わり自体をもたなければよい、というのは単純な考え方で安直すぎる。本稿のはじめに述べたように、人は関わりによって成長するのに、関わり自体を否定すると心が成

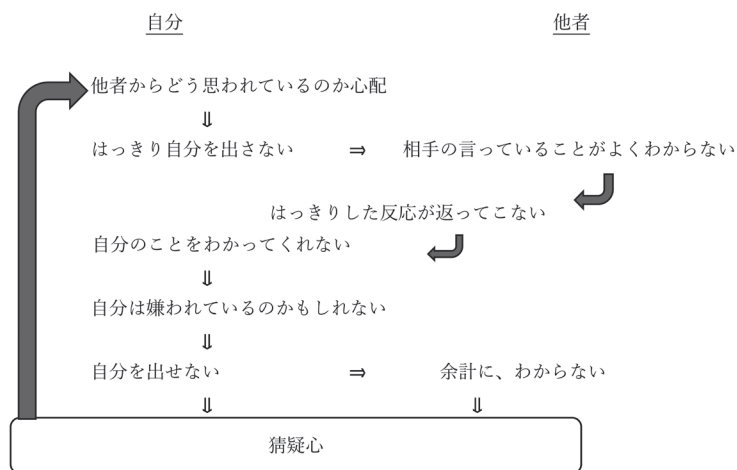


Figure 2-1 思考の流れ図（はっきり出さない例）

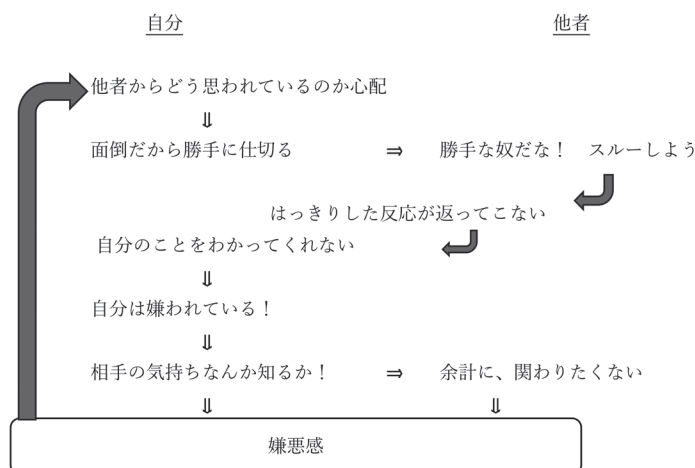


Figure 2-2 思考の流れ図（勝手に仕切る例）

長しなくなってしまう。いじめの種類としては、1997年の調査でも2019年の調査でも集団無視および集団悪口が多い。2019年の調査でも報告されているように、近年、スマホの普及によりSNS（Social Networking Service）への書き込み（「うざい」、「ムカつく」、「死ぬ」等々）が多くなっているが、これは1997年調査時にはなかったツールが増えただけで、いじめの種類が変化したわけではない。2021年のコロナ禍に起こった町田市の小学校におけるいじめ自殺事件⁹⁾は、学校から渡されたICTツールのタブレットを使って「死ぬ」等々の言葉が書き込まれており（それも友だちのタブレットに書き込まれていた）、ICTツールの使用に慣れていなかった学校関係者に衝撃を与えた。パスワードが全員共通で、誰が書き込んだのかわからないという状態で、タブレット使用における倫理、人権といったことを教員も保護者もひいては子どもたち自身も考えるには至っていなかったのである。

近年、とくにコロナ禍、人々には負のエネルギーが蓄積されている。とりわけ、子どもは、負のエネルギーの発散のしかたについて学習・経験が足りず、怒りが容易に攻撃性に結び付きやすい。そこに手ごろな手段（ツール）があれば、なおのこと、それを利用して自分のフラストレーションをぶつけてしまうのである。SNS いじめとか言われるが、根本的な問題は対人関係由来のものである。前述の2021年不幸にも自殺してしまった子も、2019年の調査で示されているように、日頃から対人関係を気にして——友だちとの距離を意識しながら——生活していたのであろう。ところが、その距離感が、誰かわからない友だちの書き込みによって他者への不信感、さらには猜疑心を増幅させ、「私のことをわかってくれない」という絶望感と「どうせ私なんか」という自己否定の相互作用によって自殺に向かわせたのだと思われる。その思考プロセスが、2019年調査の若者の特徴と一致する。

先生との関係：「先生との楽しい思い出」が1997年に比べて2019年で減ってきているのは気になるところであるが、それでも6割程度が「先生との楽しい思い出がある」と答えているので、それほど状況は悪くないように思われる。いじめが起こったとき、先生に言って、クラスで話し合いをし、いじめがなくなった、といった感謝の記述があった一方、先生は見えて見ぬふりをした、何もしてくれなかった、といった不信の気持ちを表現した反応もあった。

親との関係：いじめを受けた際、親に相談し、解決にいたった、といった報告もあったが、中学校、高等学校と年齢が上がるにつれて、親には知られたくないというのが本心のようなのである。なかには、自分がいじめをしているのを親に知られて、こっぴどく叱られた（1997年調

査）といった報告もあり、しっかりした親もいるものだと感心させられた。大河内君いじめ自殺の時などは、加害者の親が「被害者はこっちだ」と主張し、いじめ自体がなかったことにしようと学校・保護者会に働きかけていたことから考えても、いじめをする子を叱ることのできる親は立派である。

これまでの発達理論の考え方では、青年期は乳幼児期の分離—個体化（Mahler, 1975）¹⁰⁾をモチーフに「第二の個体化」（Blos, 1985）¹¹⁾と呼ばれ、「親からの卒業」の時期だと考えられていたのだが、今、若者にとって、青年期は親との関係を見直す時期になっているように思われる。そもそも、かつては、子どもには反抗期があり、親や周囲の人にとっては大変だが、子どもの「自分」作りには、反抗期は必要だと考えられていたのに、近年、顕著な反抗期が見られなくなりだしている。保護者からも、「第一反抗期（2歳過ぎから3、4歳にかけて）は、それとなくあった気がするが、第二反抗期（青年期前期）は少しぐずったくらい」といった話はよく聞く。口答えとか、反抗とか、余程、悪いことのようにとらえているのだろうか。一方、「仲が良い」という話は、自慢げに語られる。とくに、母—娘関係で、「お友達親子」が増殖し、服を共有し、一緒にショッピングに行き、話題のスイーツを前にした2人をSNSにアップする（2019年調査での報告）。親の方は若さをアピールし、子どもの方は仲良し度をアピールする。そして、「かわいい」、「いいね」といった反応を期待している。仲が良いことは好いことだし、親の若いことは結構なことなのだが、親としての役割を忘れてしまうと、子どもがこれから親になっていく指針を伝えられなくなってしまう。さらに、若者から「毒親」と称される親の存在も報告された（2019年調査）。子どもの主張や生き方ははっきりしていないので（少なくとも、親の眼からはそう見える）、心配だから、あれやこれやと口や手を出し、ひいては子どものすべてをコントロール（勉強はこうしろ、卒論を書け、就職先はここ、恋人はこういう人、等々）しようとするということである。子どもの側からすれば、過剰に口や手を出されるということになり、余計に話をしたくなる。子どもから毒親と呼ばれる人と話をしてみると、自分が何らかの失敗をしたと思っていることがわかる（就職に失敗した、結婚に失敗した、等々）。自分の失敗を子どもにはさせたくない、という気持ちが、子どもも一人の人間なのだ、という当たり前のことに気付けなくさせている。子どもが今、若者と呼ばれる段階にあるが、親もかつては若者であった。さらに、上記のような他者からの口出しを有難いと思っている若者もあり、共依存関係が自分の存在意義になっているケースもある。

世代論・若者論：若者の特徴に関しては、これまで、世代論また世代論としての若者論で語られることが多

かった。日本社会はタテ社会からヨコ社会に変わってきたと言われ、「ゆとり世代」や「新人類」等々の言葉を生み出してきた。しかしながら、ここに来て、世代論としての若者論は成立しがたくなっているとの主張が多くなっている(渡部, 2019¹²⁾; 古市, 2015¹³⁾等々)。若者論は、その性質上、世代というカテゴリーで包括し、世代内に存在する階級、階層、人種、ジェンダー、地域などの差異を不可視化してしまう問題が指摘されていた(渡部, 2019)¹²⁾。本来、様々な属性を持つはずの個別的な対象の研究を、世代全体の研究として一般化してしまうことに対する疑念や批判が、世代論批判という形をとって繰り返されてきた(早坂, 1967)¹⁴⁾。さらに、人々を属性や枠組みに位置づけることが難しくなり、「液状化」メタファーとして言及される個人化した現代(Bauman, 2005)¹⁵⁾においては、ある世代の等質性を前提とした世代論として若者論は困難だと考える方が妥当であろう。いじめに関して、「スクールカースト」¹⁶⁾といった言葉が流行したが、これは、日本の学校空間において生徒の間に発生する身分の違いを示す序列を、カーストと表現したものである。これは、もともとアメリカでクリーク(clique: 派閥)と呼ばれる生徒間関係が報告されていたものになぞらえたものと思われる。派閥とカーストは、意味合いが違うように思われるが、日本のカーストでは、「不思議ちゃんキャラ」、「毒舌キャラ」、「いじりキャラ」、「いじられキャラ」等、キャラ¹⁷⁾と連動しているといった報告もなされていた(荻上, 2009)¹⁸⁾。ただ、どの研究者も若者の関係は、固定的ではなく変化すると述べている。実際には、この変化が問題で、若者自身もこの変化が怖いという感覚をもちながら生活しているように思われる。この変化・変容をとらえられなかったのが、これまでの若者論の主要な欠点なのではなかろうか。

*

総合的に考えてみよう。本稿では、若者は関わりを避ける傾向が顕著であることがわかってきた。この傾向は、関係回避と呼ばれ、松下・吉田(2007)¹⁹⁾は、躁的防衛が低く、深い関わりを拒否する傾向が高いなど、対人関係から退却する面が一貫して認められる、と指摘する。その一方、自分の内面へ目を向ける傾向や他者からの評価を気にする傾向に関しては。一貫性を欠く、ということも見出されている(岡田, 1993²⁰⁾, 1995²¹⁾, 1998²²⁾)。さらに、関係回避する傾向の高い人の自分の内面への目の向け方は、「気持ち安定していない」等、ネガティブな自己側面には目を向けにくい(岡田, 1993)が、「自分がどんな人間なのか」等、ニュートラルな自己の内面には目を向けやすい(岡田, 1995)²¹⁾ということが指摘されている。したがって、関係回避する傾向の高い人は、自分を知りたいという気持ちはあるも

の、自分が悩んでいる、不安であるといったネガティブな状態には目を向けず、否定する傾向があると松下ら(2007)¹⁹⁾は推察している。

結語

近年、若者は、他者との関わりをもたない方向に動いているのではないかということが指摘された。意図的かどうかは別にして、関わりをもたない、または、関わりを最小限度にとどめることは、若者にとって一見、楽かもしれないが、他者に対して働きかけを提出しない分、自分に対する働きかけも少なくなる。Piaget(1952)²³⁾の言う同化(assimilation: 生体がシエマ〈心的構造〉に応じて外界情報を取り入れる働き)と調節(accommodation: 自己を外界の状況に適合するように変化させるプロセス)を行うことがなくなる／少なくなることによって発達・変容が生じにくくなってしまふのである。若者の視点からすれば、若者たちは変化・変容を怖がっているのではなかろうか。不安が先立ち、関わりを捕捉できなくなることを心配して、自分が変化することも怖いし、周りの人が変化することも怖いのである。キャラづけは、お互いの関わりを変化させないための手段だったのではなかろうか。発達障害をもつ人は変化についていけないと言われるが、症状名がついていなくても、若者たちは変化を怖がり出しているのである。

その一方で、若者たちは、とめどない承認欲求をもっている。SNSで若者たちが求めているのは、フォロワー数であり、「いいね」の称賛である。リアルな社会では人との関わりを極力避け、デジタルな社会に生きるよりどこかを求めた時、身体化した心(embodiment mind)に何が起こってくるかである。直接感覚・身体感覚をともなわない体験に、心はうまく反応できるだろうか。近年、心身症(心理社会的原因による身体症状)等の精神疾患が若者を含め全年齢層で増えてきている²⁴⁾(注 精神障害者・外来の人数は、2011年: 287.8万人, 2014年: 361.1万人, 2017年: 389.1万人; 厚生労働省「患者調査」2017年より厚生労働省社会・擁護局障害保健福祉部で作成したものから抽出)。

社会的なレベルで、それらへの対応が必要であろう。最後に、若者への問題提起を3つ出しておきたい。1. 「気が合う」といった感覚には理屈などないのに、何故、理屈を述べないと関わりがもてなくなっているのか? 自分を防衛する感覚が先立ち、理屈を述べないと、関わりをもてなくなっているのではなかろうか。2. 「ぶつかる」ことは悪いことなのか? 思い込みがあるのでは? 3. 思い込みに頼らない生き方をしてみれば?! それには、社会性(他者視点をもった見方ができる)、コミュニケーション能力(ポイントをつかんで伝える／ポイントをつかんで受け入れる力)、イメージネーション(洞察

力、想像力)が必要になるのではないだろうか。Wing (1981)²⁵⁾は、発達障害のひとつである自閉症スペクトラム(ASD)を社会性の障害(社会性の質的な差異)、社会的コミュニケーションの障害(コミュニケーションの質的な差異)、社会的イマジネーションの障害(イマジネーションの質的な差異)の3つ組の障害と定義したのだが、そのような診断レベルまではいかないにしても、若者はこの3点を気に留める必要があるところまできているように思われる。

引用文献

- 1) 岡林春雄 (2010) 知っておきたい心のしくみ: 発達とコミュニケーションの心理学 金子書房
- 2) Erikson, E. (1959). Identity and the life cycle. New York: International Universities Press.
- 3) Jung, C. G. (1929). The significance of constitution and heredity in psychology. In The collected works of C. G. Jung. Vol. 8. Princeton: Princeton University Press. pp.107-113.
- 4) 淡路円治郎 (1932, 1933), 向性検査と向性指数 心理学研究, 7, 1-54, 373-414; 8, 417-434.
- 5) 文部科学省 (2018) いじめの定義の変遷 文部科学省 HP
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2018/03/19/1302904_001.pdf
- 6) 毎日新聞 (1994) 見逃されていた SOS 今年9月保健室へ大河内清輝君がサイン—中2 いじめ自殺 12月3日
<https://mainichi.jp/articles/20180410/org/00m/040/023000d>
- 7) 豊田充 (1995) 清輝君が見た闇 いじめの深層は 大海社
- 8) 教育資料庫 (2019) 愛知県西尾市立東部中学校いじめ自殺事件 11月29日
<http://kyouiku.starfree.jp/d/post-9115/>
- 9) 東京新聞 (2021) 東京・町田の小6女児が自殺, 同級生からのいじめ示すメモ 遺族「学校のタブレット温床に」9月13日
<https://www.tokyo-np.co.jp/article/130621>
- 10) Mahler, M. (1975) The Psychological birth of the human infant. Basic Books. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀 (訳) 1981 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化— 黎明書房
- 11) Blos, P. (1985) Son and father: Before and beyond the Oedipus complex. New York: Norton. 児玉憲典 (訳) 1990 息子と父親 誠信書房
- 12) 渡部 光 (2019) 「相互作用する若者」論—世代論はいかにして可能か— 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書 第345集 pp.2-12 移動と接触—家族・地域・世代を超える関係形成
- 13) 古市憲寿 (2015) 「若者論」の終焉, あるいは始まり: 討論者の立場から 高齢社会の若者論—労働・福祉・コミュニティを考える—学術の動向 40-45
- 14) 早坂泰次郎 (1967) 世代論—歪められた人間の理解 日本 YMCA 同盟出版部
- 15) Bauman, Z. (2005) Liquid life, Cambridge: Polity Press. 長谷川啓介 (訳) 2008 リキッド・ライフ—現代における生の諸相— 大月書店
- 16) 鈴木翔 (2012) 教室内カースト (光文社新書) 光文社
- 17) 土井隆義 (2009) キャラ化する／される子どもたち—排除型社会の新しい人間像— 岩波ブックレット 759 岩波書店
- 18) 荻上チキ (2009) 社会的な身体—振る舞い・運動・お笑い・ゲーム— 講談社
- 19) 松下姫歌・吉田美悠紀 (2007) 現代青年の友人関係における“希薄さ”の質的側面 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 56, 161-169
- 20) 岡田努 (1993) 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 21) 岡田努 (1995) 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 22) 岡田努 (1998) 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 教職研究, 9, 29-39.
- 23) Piaget, J. (1952). The Origins of Intelligence in Children. New York, NY: W. W. Norton & Co.
<https://doi.org/10.1037/11494-000>
- 24) 厚生労働省 (2020) 精神疾患を有する外来患者数の推移 (年齢階級別内訳)
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyo/kyokushougai/hokenfukushibu-Kikaku/0000108755_12.pdf
- 25) Wing, L. (1981). Asperger's syndrome: a clinical account. *Psychological Medicine* 11 (1): 115-129. doi:10.1017/S0033291700053332

Youth Moving in the Direction of Avoiding Involvement

Haruo Okabayashi

Summary

In recent years, Japanese youth have avoided engaging with others. From the 1997 survey results and the 2019 survey results, the youths have similar thought loops in the relationships with others, however, by repeating those loops, the negative schema works and the youth in 2019 survey tend to avoid interpersonal relationships. On the other hand, they, especially the youth in 2019 survey has Approval desire strongly. Therefore, it is suggested that maladaptation phenomena such as psychosomatic disorder are likely to occur easily due to the gap between Interpersonal avoidance and Approval desire. Finally, this article raises the following three issues to youth: 1. There is no reason for the feeling of “getting along,” so why is it that you have to say the reason to get involved? 2. Is it a bad thing to have discussion? 3. Why don’t you acquire sociality, communication skills, and insight?

Keywords: youth involvement, vicious circle of thought, interpersonal relations, bullying